

P-098

肢体不自由特別支援学校児童生徒の健康栄養評価シートの作成

野田 智子、齋藤美奈子

つくば国際大学 医療保健学部 看護学科

【緒言】

肢体不自由特別支援学校児童生徒では、前思春期（小学校低学年）にすりつぶし機能の獲得まで至らなかつた児童生徒の半数に、思春期以降、摂食嚥下機能の後退が生じていた（野田ら,2011）。したがって、児童生徒の栄養状態を評価し、適切な栄養ケアに繋げることは健康管理を行う上で重要である。しかし、障害特性から、文部科学省が推奨している評価項目や指標を用いることは難しい状況にある。そこで、児童生徒の障害特性と学校現場で評価するという点に視点を置いた健康栄養評価シートを作成した。

【方法】

評価項目と実施方法は、肢体不自由児・重症心身障害児施設における先行文献から抽出し、これに学校現場の意向を反映させた。評価の基準値は、筆者の先行研究（野田,2022）と専門医の指導により検討を行った。

【結果】

評価項目は、「客観的状態」「発育状態」「栄養状態」「随伴症状の状態」の4項目とした。評価回数は現在学校で実施されている年3回（3～4か月毎）の発育測定時に実施することとした。4つの評価項目の概要は以下の通りである。

「客観的状態」は観察による第3者の気づきに関する項目である。普段児童生徒に接している担任が児童生徒の「活気・表情」についてチェックする。

「発育状態」は個人の発育の経過を確認していく項目である。発育測定における「身長計測値」、「体重計測値」、「BMI値」から性別年齢別身長別標準体重における割合を算出して評価する。

「栄養状態」は栄養障害のリスクを算出する。「体重変化」と「BMI」からリスクスコアを算出して評価する。リスクスコアは5段階で、数値が大きいほどリスクが高くなる。「BMI」の基準値は、肢体不自由特別支援学校児童生徒の身長・体重計測値のデータ分析から得られた運動機能別学部別中央値を採用した。

「随伴症状の状態」は随伴症状の変化を確認する項目である。随伴症状については『重症心身障害児のおもな随伴症状とその相互関係』(船橋,1989)を参考に、「易感染性」「呼吸状態」「てんかん発作」「嚥下状態」「消化器状態」とした。随伴症状の状態をリスクスコア表にある5段階の中から評価する。リスクスコアは数値が大きいほどリスクが高くなる。

なお、この健康栄養評価シートは発育曲線チャートと栄養・随伴症状リスクチャートで視覚化される。今後は作成した健康栄養評価シートを発信し、検証を行ってていきたい。

P-099

医療型障害児入所施設における保育士の勤務経験年数による業務認識の差異

川合 美奈

埼玉医科大学 保健医療学部 看護学科

【目的】

全国の医療型障害児入所施設で勤務する保育士の業務に関連する認識の実態調査から勤務経験年数による違いの有無を確認し、教育方法への示唆を得ることである。

【方法】

2022年1月から6月に全国の重症心身障害児施設213施設へ依頼文を郵送し、71施設の保育士430人への質問紙の配布を行った。個人属性、業務内容、業務に関連する認識を確認した。保育士キャリアアップ研修の枠組みから、勤務経験年数を3区分とし比較分析した。

【倫理的配慮】

研究者所属機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。協力は任意であり、協力しなくても不利益はない。質問紙の回答・返送をもって同意とし、同意後も撤回可能である。調査は無記名で個人や施設は特定されず、得られたデータは本研究のみに使用する。以上を文書にて説明した。

【結果】

保育士の業務内容では、療育活動・発達支援、直接的な生活支援（更衣、清潔ケア、食事介助、オムツ交換など）、間接的な生活支援（居室の清掃、ベッド周囲や子どもの荷物の整理整頓など）、行事の企画・運営はいずれの群も業務であるという認識が高かった。業務の楽しさ、やりがいは、有意差を認める項目はなかった。業務の大変さは「自分がしたい業務イメージと現実の不一致」、「重心保育士としての経験の浅さに伴う自信のなさ」、「自分自身への不能感や自信のなさ」等の5項目に有意差を認めた。業務の困難さでは、「自分自身の医療知識の不足」、「重心保育士としての経験の浅さに伴う自信のなさ」等の4項目に有意差を認めた。改善の希望では「家族への対応に関する施設内研修」のみに有意差を認めた。これから学びには有意差を認める項目はなかった。

【考察】

経験年数が長い群の方が自身の業務イメージを明確に思い描くことができるが、それゆえに大変さを感じるものと推察される。経験の浅さに伴う自信のなさ、不能感や自信のなさは、経験年数が短い群のほうがより大変さを感じていたが、経験の蓄積によって徐々に変化が見られるものと考える。改善の希望では「家族への対応に関する施設内研修」のみ3年目以下×8年目以上の2群間で有意差を認めた。同じ施設に長く勤務することによって、その施設での重心保育士としての経験が蓄積されていくため、経験年数の多い群の方が対応能力の向上が見込めるためであると考える。教育方法には、個々の経験に応じた工夫が必要性である。